

交易と交流の深化と断絶過程からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究

小口, 雅史 / OGUCHI, Masashi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費補助金研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2011-05

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成23年 5月25日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320108

研究課題名（和文） 交易と交流の深化と断絶過程からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の
実態的研究研究課題名（英文） Study on the actual situation of Japanese ancient northern area
which faces Tsugaru strait through trade and exchange

研究代表者

小口 雅史 (OGUCHI MASASHI)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

研究成果の概要（和文）：津軽海峡を挟む世界での交易と交流の実態について、文献史料の悉皆調査と続縄文土器や擦文土器の詳細な比較、さらにはそれらのデータベース化によって、具体的なものの流れを解明した。この地域は北からも南からも様々な形でいろんなモノが動いたが、古代の広いスパンを対象にとって考えてみても、一定の共通した相互影響の方式が存在することが明らかになった。陸奥湾岸は北海道と、岩木川流域は出羽方面と、県南地方は陸奥方面と深い交流関係を維持し続けた。これが後世の地域性形成に大きな影響を与えたと考える。

研究成果の概要（英文）：We studied the actual situation of ancient North-Japan area which faces Tsugaru strait. At first we researched historical material on ancient north-south trade, then researched Zokujomon ware and Satsumon ware, besides, we completed the databases about the historical materials and ware. We utilized the databases, then grasped the actual situation about exchange of ancient northern area. Throughout ancient times, there was common system on the trade in the ancient northern area. For example, between Mutsu-wan and Hokkaido, between the basin of the Iwaki river and Dewa district, between Kennan of Aomori and Mutsu district. This is the reason of formation of dominant characteristic in following times.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：日本古代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：北方交流、津軽海峡、続縄文土器の交流、擦文土器の交流、外来系土器、移民の実態、渡嶋世界

1. 研究開始当初の背景

近年、ともすれば日本列島内で均一的に考えられてきた「日本史」研究に対する反省として、むしろ地域的特色を解明して列島内における多様な地域文化の存在を明らかにす

る研究が活発になってきている。とくに列島の南北両端地域の史的展開過程については、「もう一つの日本」ないし「もう二つの日本」というキャッチフレーズのもと、いわゆる「日本国」の在り方とは異なる、その際だっ

た特色について徐々に明らかにされつつある。とくに中世において「ひのもと」と呼ばれ、名実共に「もう一つの日本」となった北日本の歴史は、多様な「日本史」の存在を研究するとき、もはや無視できない重要な存在になってきている。そのキーワードが「交易と交流」である。

北日本地域は津軽海峡によって地理的には大きく二分されているが、この海峡は必ずしも「交易と交流」上の境界の役割を果たしていたわけではない。典型的な事例としては、7～9世紀に北方に存在した「渡嶋」と呼称された地域があるが、小口は一連の文献的研究の中で、これを津軽海峡を挟んで対峙する北奥と道南地方を指すと考えてきた。

もちろんこれには異論もあって、考古学的には津軽海峡は9世紀前後には北の境界としての役割を果たしたという意見もある。

そもそもこの地域についての文献史料は現地に伝えられたものは皆無とって過言ではなく、そこで、中央で記録されたものを、現地の立場で読み直す作業が求められ、また現地の物証である考古学的資料とのすりあわせが必須であると考えてに至り、本テーマに取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究では、従来必ずしも十分でなかった文献史学と考古学研究の協業・融合を、北方世界に即して具体的に実現させることによって、交易と交流の具体層を鮮明に描き出し、その展開過程から、津軽海峡が交易と交流を深化させる役割を果たした時期と、境界として両者を断絶させた時期とを明確に分け、これらを総合して北緯40度以北の世界の史実態を解明することを目的とするものである。これによって、結果的によりゆたかな日本史像を描き直す一助することも考えた。

とくに土器については研究史上大きな問題が横たわっている。たとえば津軽海峡を挟む世界の土器型式研究において先駆的画期的業績をあげ、通説的位置を占めるにいたった三浦圭介の土器様式理解については、なお必ずしも整合的でない部分が多々ある。北奥地方の土器の特色解明には道南地方のそれとの比較が必須であるが、本研究グループはこの分野において、これまでも精緻な分析作業を実施してきており、今回の研究のすりあわせによって、土器という生活に密着したレベルでの交流関係についても、新しい成果を生み出すことを目指していく。

3. 研究の方法

本研究では、全体を文献的研究と考古学的研究に分け、最終的にそれらを統合する方法をとることとした。

(1) 文献的研究の中心となるのは交易関係

史料悉皆調査である。この試みはかつて『青森県史』編纂時においてなされたが、時間的制約と刊行する県史の紙数の物理的制限から、未完のままに終わっていた。しかしながら、中央の膨大な文献に相当量の記述がある、北からもたらされた物資を中心とする交易関係史料の悉皆調査が実現すれば、北方世界といわゆる「日本国」との交易が具体的にどのような分野からどの時期にどの地方を中心にして開始され、それが時間軸にそってどのように変化していったのかを確定することができる。従来の北方史研究の中では、北方世界からの交易品として、その包括的な品名リストは作成されてきたが、それぞれの初見史料がどれで、いつであったのか未解明なものが多々あって、北方史の特徴である北方特有の物資についての具体的な流通を考えるときの障害となってきた。これを明らかにすることは当該分野の研究にとって焦眉の急である。さらなる研究の進展のためには、どの物産がどの時期にどこからどこへ移動したのか今回確定する必要がある。本研究グループはあらためてその作業に取り組み、対象も未刊行史料にまで広げて、南北交易の実態の時間軸にそった変遷を追うことができるようにした。その成果はExcelで表形式にまとめ、自由に検索できるようにする。

(2) 考古学的研究の中心は、津軽海峡を挟んで北と南とで、土器の類似性の精密な分析である。縄文時代、とくに後北式・北大式期から擦文時代に至るまで、具体的な特徴の比較分析を行う。それによって津軽海峡を挟む世界での人の移動の具体像も検討する。後北式～北大式期については、悉皆調査によるデータベースを作成して、比較を網羅的かつ精密にできるようにする。

考古学分野ではもう一点、瀬川拓郎によって、奥尻島の文化を特異な青苗文化として独立して考える見解の再検討を行う。小口と小嶋がこれまで行ってきた北部日本海域の離島文化の調査によれば、本州とは関わらない離島間だけで伝わった文化が存在する可能性がある。それをもとにあらためて「離島をつなぐ文化」、モノの移動の可能性も再分析する。

4. 研究成果

(1) 交易関係史料悉皆調査とその分析…文献研究グループで企画した北方交流関係物産史料の総めくりを完了することができた。最初に基本対象典籍49点を定めて、分担して悉皆調査に入った。それに加えて、重要文献でありながら活字本が刊行されていないため、これまでほとんど利用されてこなかった『愚昧記』『顕広王記』について、まず底本調査を行い、善本の写真版による収集を行った。これらの総めくりも完了したが、これ

らは既往のこの種の調査においては全く利用されたことがなく、北方物産の史料集成の精度をあげることができた。また新刊史料類（大日本史料や大日本古記録など）もその都度調査の新規対象として、完璧を期すことが出来た。

その成果は Excel のファイルに統合し、共同研究のためのスタンドアロン版北方物産交流データベースに仕上げている。近い将来、WEB 公開できるように、細部にわたる書式統一整備も進めた。

それにもとづく交易制の実相についても再検討した。陸奥臨時交易御馬、陸奥・出羽臨時交易絹、貢金、陸奥・出羽交易雑物、鳥類（出羽鶉・肅慎羽・鷺羽・鷺尾・出羽鷹）、水豹、けふの狭布、陸奥紙などを中心に、その出現時期と頻度をあらためて確認した。基本的には 11 世紀を迎えてからこれらの貢納物が一斉に揃ってくるという傾向を、あらためて強く主張しても良いと思われる。

またこれらと併行して、交流と交易がもたらした副産物の一つとして、津軽・渡嶋蝦夷が関与した元慶の乱をも取り上げ、その実態についての再構成を試みた。結果として秋田城下の蝦夷と津軽・渡嶋の蝦夷との違いによる交流の差異を明らかにすることが出来た。

(2) 土器を対象とする交流の解明…土器グループでは、当該期の津軽海峡を挟む交流を具体的に示すものとして、続縄文及び擦文土器を取り上げることとし、重要観察項目として「外来系土器の製作地及び製作者の確認」「土器の使用形態の確認」「地域性の確認」を定め奥尻島及び津軽半島中泊町を調査対象として具体的な検討を実施した。また北海道埋蔵文化財調査センター収蔵の、本州との関係の深い土器を実見・調査した。

またそれらの成果を共有するために、北海道と青森県を対象に、さまざまな特徴を盛り込んだデータベース化を実施した。60 項目に及ぶ詳細な記入対象を定め（主要なものとしては、遺跡種別、立地情報、遺構の内容〈竪穴、掘立、土坑、小ピット、井戸など〉と、遺物〈層位・器種・動植物遺存体など〉、科学分析〈¹⁴C・産地同定・花粉分析・鉄滓分析・植物珪酸体分析・玉類分析・珪藻分析など〉、関連文献など）、FileMaker Pro 用いて入力し、さらに土器の画像を取り込んだ上で、法政大学国際日本学研究所のサーバー上で公開した。

こうした現地調査の結果とデータベースの利用を踏まえて、最終的に合同総括検討会を開催した。

本州の土器が北海道の土器に与えた影響について、北大Ⅲ式 2 期と 3 期の間に画期があること、その時期に東北北部の土器と同形式の土器が渡嶋半島から道央部に広がるこ

とが確認できた。

また古代北日本の地域間交流については、道央・道南・外浜・津軽・能代・下北・上北・南部といった地域区分を前提に、人や物の動きをどのようにとらえて、そこから何を読み取るかについて、さまざまな側面から地域間比較を中心に検討することが出来た。結果として相互に大きな文化的影響を与える過程の詳細が明らかになったが、一方で、津軽海峡を挟む地域間は、そうした交流による文化的流動性はたしかにあったが、本来の地域性・地域文化も相当程度、保持された可能性も認めなければならないことも明らかになった。もちろんそれにも地域差があり、各々の事情を今後より精密に検討することを次の課題として共通認識することが出来た。

(3) 最終成果の公表…以上の最終的成果については、科研費報告としてまとめてものを再構成して市販本として公表する準備に入っており、2011 年度中に刊行される手はずになっている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

- ① 小嶋芳孝、ロシア沿海地方における渤海遺跡調査（2010 年）、金沢学院大学紀要、査読無、9、2011、29-42
- ② 小口雅史、青森県石江遺跡の位置づけをめぐって、『北方世界の考古学』、査読無、2010、305-307
- ③ 小口雅史、北日本の古代末から中世、『北東アジアの歴史と文化』、査読無、2010、337-356
- ④ 熊谷公男、秋田城の廃問題と九世紀初頭の城柵再編、アジア文化史研究、査読無、11、2010、1-18
- ⑤ 熊谷公男、元慶の乱の「史闕」記事をめぐって、国史談話会雑誌、査読有、50、2010、111-127
- ⑥ 天野哲也、礼文島香深井 1 遺跡 2 号竪穴住人の行方—オホーツク文化前期・中期の開拓と挫折—、『北東アジアの歴史と文化』、査読無、2010、287-295
- ⑦ 天野哲也・小野裕子、他 8 名（3 番目・4 番目）、Polymorphisms and allele frequencies of the ABO blood group gene among the Jomon, Epi-Jomon and Okhotsk people in Hokkaido, northern Japan, revealed by ancient DNA analysis、Journal of Human Genetic、査読有、55、2010、691-696
- ⑧ 小嶋芳孝、クラスキノ城跡井戸出土土器群

の考察、『北東アジアの歴史と文化』、査読無、2010、213-229

- ⑨小嶋芳孝、「海東盛国」渤海の考古学、『よくわかる考古学』、査読無、2010、210-213
- ⑩熊谷公男、城柵論の復権、宮城考古学、査読有、5、2009、51-66
- ⑪熊谷公男、律令国家形成期における柵戸と関東系土師器、『古代社会と地域間交流』、査読無、2009、163-191
- ⑫天野哲也、有孔・溶融土器、『史跡最寄貝塚』、査読無、2009、337-341
- ⑬天野哲也・小野裕子、他6名(2番目・3番目)、Mitochondrial DNA haplogrouping of the Okhotsk people based on analysis of ancient DNA: an intermediate of gene flow from the continental Sakhalin people to the Ainu、Anthropological Science、査読有、117(3)、171-180
- ⑭小野裕子・天野哲也、アイヌ化と領域—北奥アイヌ文化の形成過程を考える—、『中世東アジアの周縁世界』、査読無、2009、283-300
- ⑮天野哲也、ユーラシアを結ぶヒグマの文化ベルト、『ヒトと動物の関係学』、査読無、4、2008、45-68
- ⑯天野哲也・小野裕子、他6名(3番目・4番目)、Nonmetric cranial variation in human skeletal remains associated with Okhotsk culture、Anthropological Science、査読有、116(1)、33-47
- ⑰三辻利一・小野裕子・天野哲也、オホーツク文化の集団間・対外交流の研究—1. 礼文島香深井1遺跡出土陶質土器の蛍光X線分析、北海道大学総合博物館研究報告、査読無、4、2008、139-152

[学会発表] (計4件)

- ①熊谷公男、『蝦夷』とは何か—文献史学の立場から—、日本人類学会・骨考古学分科会、2010年10月2日、だて歴史の杜カルチャーセンター
- ②小野裕子、Study of so-called 'Okhotsk Culture'—based on Its' Early Stage、THE SIXTH DIKOV READINGS Devoted to the N. N. Dikov' 85th birthday and to the 50th anniversary of the North-Eastern Interdisciplinary Research Institute, Far East Branch of the Russian Academy of Science、2010年3月25日、City of Magadan, Russia, North-Eastern Interdisciplinary Research Institution, Far East Branch of the Russian Academy of Science
- ③小野裕子、オホーツク文化とは—北東アジアからの古代海洋民、噴火湾文化財研究所「縄文講演会」、2010年3月27日、だて歴史の杜カルチャーセンター

- ④熊谷公男、北からみる地域間交流の諸問題—柵戸をめぐる問題を中心として—、シンポジウム「古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相」、2008年4月26日、国土館大学

[図書] (計3件)

- ①熊谷公男、他、高志書院、『古代中世の蝦夷世界』、2010、290
- ②小口雅史、他、法政大学国際日本学研究中心、『古代末期の境界世界—石江遺跡群と城久遺跡群を中心として—』、2010、464
- ③小口雅史、他、岩田書院、エミシ・エゾ・アイヌ、2008、463

[その他]

後北式・北大式土器を中心とする遺跡・遺構・遺物データベース

<http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/zokujomon/>

北方史関係統合データベース

<http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/togo/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小口 雅史 (OGUCHI MASASHI)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00177198

(2) 研究分担者

熊谷 公男 (KUMAGAI KIMIO)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号：70153343

天野 哲也 (AMANO TETSUYA)
北海道大学・総合博物館・教授
研究者番号：90125279

(3) 連携研究者

小嶋 芳孝 (KOJIMA YOSHITAKA)
金沢学院大学・美術文化学部・教授
研究者番号：10410367

小野 裕子 (ONO HIROKO)
北海道大学・総合博物館・学術研究員
研究者番号：80400034

(4) 研究協力者

八木 光則 (YAGI MITSUNORI)
盛岡市教育委員会

伊藤博幸 (ITO HIROYUKI)
奥州市埋蔵文化財調査センター

宇部 則保 (UBE NORIYASU)
八戸市教育委員会

齋藤 淳 (SAITO JUN)
中泊町博物館